

## シヨパンへの愛 加藤 香緒理

ポーランドの伝統的文化を紹介する目的で、ポーランド国立クラクフ音楽院教授・ジェシュフ大学ピアノ科長ヤヌシュ・スコヴロン氏によるピアノリサイタル「ポーランドからの贈り物」が2025年2月に江別市と大空町女満別で催されました。この演奏会のコーディネーターとして私の地元である北海道ヘクラクフから同行しました。また10月にはワルシャワで第19回フレデリック・シヨパン国際ピアノ・コンクールが行われました。



スコヴロンピアノリサイタル

### 第19回シヨパン国際ピアノ・コンクール

シヨパンは日本で人気がとても高く、コンクール会場のワルシャワフィルハーモニアでは、普段聞くことがない日本語をこの期間だけはたくさん耳にします。前大会はパンデミックと重なりましたが、それでも会場にはたくさんの日本人がみえて、みなさんのシヨパンの作品への愛を感じました。



シヨパンコンクールは1927年に第1回が開催され、第2次世界大戦による中断の後、戦

桑原詩織さん(上) 西本裕也さん

後復興と共に再開されました。この第4回コンクール(1949年)の優勝者がスコヴロン氏の師、ハリーナ・チェルニー=ステファンスカ先生です。日本人はほぼ毎回入賞者が出ますが優勝者はまだいません。今大会では中国人奏者のレベルの高さが非常に印象的でした。16歳のリュウ・ティエンヤオさんもその一人で、日本から出場された桑原詩織さんと並んで4位に入賞しました。彼女についてはコンクール前にスコヴロン氏から「素晴らしい中国人学生のレッスンをした。ワルシャワでの優勝を待っていると伝えた」と聞いていました。



リュウ・ティエンヤオさんとスコヴロン氏  
2025

コンクール開催中にごく注目され始めて、技術的に素晴らしいだけでなく、

音楽的にもすでに感覚的に理解して自由自在かつ自然に演奏できることに驚きました。

このコンクールは奏者がピアノを選ぶことができますが、スタインウェイ、ファツィオリなど世界の名器が並ぶ中、今大会では日本メーカーの KAWAI (SK)を選んだ奏者が多かったのも特徴的でした。

コンクールは全世界からインターネットで LIVE演奏が聴けるようになりましたが、ワルシャワの会場で生の演奏を聞くと、座る場所によって音の聞こえ方がこうも違うものかと思うほどに異なります。実際に私は数回会場に足を運びましたが、審査員も席替えをしながら聞いていました。

今年から採点方法が変わり、予想外の結果に審査員もびっくりした表情でした。このコンクール独特の気迫と緊張感、歴史が生まれる瞬間は特別な時間だと感じます。

シヨパン音楽の魅力ゆえにこのコンクールの文化価値がどれほど大きいのか、日本の皆さんにもお伝えしたいと思います。

### ヤヌシュ・スコヴロンピアノリサイタル

シヨパンコンクールの優勝者の下で研鑽されたスコヴロン氏のピアノリサイタルは、入場無料であったという間に整理券が無くなり、普段クラシック音楽を聞かない方も含めて多くの方にご来場いただきました。聴衆の方々からのメッセージに「音がいいとか、技術がすごいとかを超えて、我々日本人がクラシックと呼ぶ音楽が、ヨーロッパの人たちの血であり肉であることを感じた」というお言葉をいただき、その文化的価値は伝わったのではないかと感じました。

文化は人の生活を豊かにするかけがえの無いものであり、今回、私がポーランドで学んだ心の深いところで感じるお金で買えない豊かさの価値を、日本に伝えたいと思い企画させていただきました。ぜひまた、今年も日本に行きたいと思っています！暖かくご後援いただきました北海道ポーランド文化協会のみなさま、ありがとうございました。

(かとう・かおり、ピアニスト、クラクフ在住、江別市出身)